

《インタビュー》

東京都立園芸高等学校統括校長

徳田 安伸氏

農業高校 は面白い

東京都世田谷区の住宅に囲まれた地区にある東京都立園芸高校。「農業高校は面白い」と語る徳田安伸統括校長に、農業高校の現状やJ・A、農業関係者に望むことなどを聞きました。

【広報部】





授業で生産した野菜を特別実習として駒沢オリンピック公園で販売する都立園芸高校生

都市部の農業高校と地方の農業高校はだいぶカラーが違います。特に東京は農業が急速に減少し、自然からだいぶ離れた地域です。今では東京で農業をするというのはステータスな存在になってきていると思います。都立で農業高校が受け入れる生徒は全体の1・6%です。入学してくる子どもたちの中には、お花

やお菓子作りが好きだとか、昆虫のオタクだとか、土に触りたいとか他とはちよつと違うことをやってみたいという子どもが求めているようです。東京では農業が非日常で、農業高校の位置が上がってきていると思います。わが校には東京で唯一の動物科があります。ペット、社会動物について学びますが、推薦

で7・6倍、一般入試で3倍、都内で倍率は一番高く、人気校です。

女の子のなりたい職業をかなえる

小学生の新聞調査を見ると、6年生の女の子の将来のなりたい職業は、シェフ(調理師)、パティシエ(お菓子屋さん)、お花屋さん、動物園の飼育員がベストテンに必ず入っています。なりたい職業の上位を農業高校が網羅していて、農業高校で夢をかなえられるということです。

小学校まではすごくいい教育をしています。中学に入ると一気に受験教育になって、偏差値の高い学校に行くのがいい教育なんだという間違った教育がだいぶ残っています。それにくみしない子が来てくれています。

親が農家で、生産農業をしている子どもは本校ではゼロですが、花屋や青果店、造園業・レストラン・和菓子屋など関連産業に従事していらつしやるご家庭は結構数います。農業は総合産業ですからね。でも、その中で祖父母が田舎で農業をやって

いて、小さい頃、帰省して農作業を手伝った体験があり、将来、親の里に帰って農業をやりたいという子もいます。農業系大学や農業大学校に行つて、卒業後、農業をやる子もいます。今年は北海道の農業大学校に行つて、農業に関係するところで働きたいという元気な女子が3人もいます。

子どもたちが成長するプロジェクト学習

農業クラブは、1946(昭和21)と1950(昭和25)年にアメリカの教育使節団がやって来て、日本に農業クラブを入れたさいと指導したことがスタートです。家庭科も同じです。今でも農業クラブと家庭クラブは学習指導要領の総則の中に書き込んであります。工業、商業高校は資格取得がメインですが、農業高校ではプロジェクト学習に力を入れてきました。学習の成果を発表する全国大会があるのも農業高校の特徴の一つです。新しい学習指導要領では課題解決的なプロジェクト学習、普通科にも探求という名前が入ってきています。プロジェクト学習は子

どもたちが成長する上で、すごく、すごく大切です。物事に対する考え方が論理的で、かつ柔軟になります。

高度経済成長期は、地方から都市部に人材を送り込んで経済を成長させようとした。学校教育も同じように知識をいっぱい詰め込んだ子を都市部の大学にやることを良しとしていたんですよ。工業高校でも都市周辺の工業地帯に卒業生を何人送ったかを競っていました。子どもが5人も6人もいる家庭から出せる時代はよかつたのですが、子どもが1人、2人になってきて、これまでのように送り出したのでは、地方から子どもがいなくなります。地方がどんどん疲弊しています。

そういう価値観を変えなければならぬと思っています。農業教育は、地元、自分の地域にあるものをもう一回見直して、それにちゃんと光を当てて学習しましょうというのが根っこにあります。

普通科だと東大に何人、有名大学に何人送ったかがその学校の価値であつて、進学した子どもが卒業後に何人地元に戻って

きて地元の活力を担ってくれるかは関係ないんです。一方通行でどんどん(卒業生を)出すだけです。そういう教育に走ってしまっただけです。

地域を支える 人材育てる農高

それに対して農業高校の子

たちは、あまり遠くに行かない、多くは県内です。地元にいると何ができるかというところ、そこで子育てができますよね。子どもの教育、地域のお祭りや行事にも参加する、おじいちゃん、おばあちゃんの面倒を見る、介護ができるということ、そこにコミュニティが残る、文化の継承もちゃんとできるわけです。エリートだけじゃなくて地元に残る人材をしつかりと育てることが農業高校の大きな役目だと思っています。なんとすれば、農業は土地密着型の産業ですから、子どもたちも土地密着型に育ちます。

農高の教員はそういう考えを共有していますし、文部科学省も考えていますが、どこどこ大学に何人出したがステータスになっている地域がまだまだあり

ます。いろいろな会議で全国を回らせてもらって、現地の教育長や幹部と話をする機会があります。「最近の全国の動きは農業高校重視なんですよ。なぜかと言うと(卒業生は)地元に残って地元を守るんですよ。県費を投資した価値が出てくるのは農業高校なんです」と説いています。

しかし、子どもの数が少なくなり地方では定員割れの学校ができました。農が日常なところは、非日常を求めて農のない学校を求め、農があることを敬遠している実態があります。一方で、親の経営基盤がしつかりしている地域、例えば熊本県の熊本農業高校や菊池農業高校には生徒が集まっています。しかし、周辺では定員割れのところもできています。農業高校が単独で成立しなくなると、商業科とか工業科とか、普通科も巻き込んで一緒にしてしまう動きが増え、表に農の字を出せなくなっています。380ほどの全国農業高等学校校長協会加盟校のうち、農業高校とうたっているのは3分の1です。後は併設や総合学科の高校になってしまいました。

マーケティング学が 場提供をJAに要望

農業高校は今、地元を見直す活動、地域のブランド開発を生懸命やっています。地元のものを活用してブランドを作る地域のブランド化に加え、学校の生き残りもかけています。それ

を地域のJAと組んで、ファーマーズマーケットに出してマーケティングの勉強をさせてもらう学校があります。学校からお願いして一角を借りているのが実態だと思います。残念ながらJAから声が掛かる例はほとんどないと思います。私がJAグループにお願いしたいのは、

マーケティングの場を提供してほしいということです。

本校近くでは駒沢オリンピック公園にカフェレストランが出来て、その横で毎月第2・第4土曜日、世田谷区内の契約農家が旬の野菜を販売するファーマーズマーケットを開いています。そこに本校にも場を提供していただけたので生産した野菜を持参して特別実習や部活動として販売しています。

学習で栽培した農産物は東京都のものなので売上金は全額都に戻入します。県によつては実験実習費として学校に1000万円やるから、1000万円を売り上げなさい、100%返しなさいというところもあります。授業には生産を伴わないものもあり、勢い、生産を伴う授業で稼ぐため、生徒が学習者ではなく、労働者的なってしまふところもあります。一年中トマトを作って毎朝収穫実習を行うところもあります。「うちの学校は何千万円売り上げた」という競争もありました。東京都はそれを撤廃しました。100対ゼロでもいいと。しかし、実際的にはそんなこと



徳川家光が大事にしていたという五葉松の盆栽と徳田校長



プロフィール

とくだやすのぶ。1957年、熊本県生まれ。筑波大学農林学系卒業。初任地の郡立三宅高校時代は三宅島連山の噴火に遭遇。生徒と火山灰がきに汗を流した。大学時代は農芸化学を専攻。大豆発酵食品への普及にも力を注いでいる。2006年から校長職を歴任。2015～16年度は全国農業高等学校長協会理事長。自他ともに認める「くまモン愛好家」。

はできませんから100対60ぐらいにはしています。しかし、どんなに作っても全部に収めるのでは学習意欲や労働意欲は湧きません。そこで10年ほど前から都に戻した額の50%を翌年、学校に戻す制度が導入されました。「実業意欲向上プログラム」といいます。実習生産金を学校にバックしてくれているのは、多分、東京だけではないでしょうか。

ブランド化は、物をブランドにするものと、サービスも含めてブランド化するものがあります。調理品なども提供しながら、JAと一緒に出すということもあるでしょう。そういった場合JAに提供してもらおうと、子どもたちにとってもいいし、JAの理解にもつながります。直売

所に出荷している農家や運営している人たちとも交流できるので、ますます、いい関係ができるでしょう。われわれはそれを求めています。これからマーケティングの学習は、ますます重要になってきます。

農業法人は次世代育てる「寺子屋」に

農業をやりたくて農業法人に入る子がいます。農業法人は今年全国で2万2000ぐらいありますが、全部が全部、若者を育てようとしてくれていません。単なる労働者扱いのところも聞かれています。次の農業経営者としての後輩をつくるんだという意識で経営しているところと、そうでないところがあります。法人は「農業の寺子屋」になって

もらいたいと思います。そこを指導してもらえなのがJAだと思うっています。

農業を志す子どもたちは最終的には経営者を目指します。(農業法人で)研修した後に耕作しなくなった土地を「お前どうだ」とあつせんしてくる、そうところまでケアをしてもらえないと、子どもたちは頑張れないと思います。

補助輪じゃないですが、ロケットのようにある程度加速できるまでは補助がないと駄目です。それは経済的なものもあるし、技術的指導もあるし、あるいは精神的な、人間的なつながりとしてのコミュニケーションもあります。それをやっていただけなのは、法人の親方たちです。次の世代として自分の息子たちが継げればいいですが、自分の子に継がない場合は、研修生に継がせるといふふうには、農地の継承をしていかなければならないと思います。

農業経営体が全国で125万、そのうち家族経営は122万で、98%が家族経営です。規模の大きな法人に子どもたちが入っていったら、経営を引

東京都立園芸高校



所在地は東京都世田谷区深沢。実習地として等々力溪谷下流に玉川果樹園、静岡県下田市の須崎御用邸前に下田農場を持つ。1908(明治41)年東京府立園芸学校として開校、1948年(昭和23)年東京都立園芸高等学校と改称、2006(平成18)年動物科を設置、園芸科、食品科に学科改編し、現在に至る。全日制と定時制課程がある。卒業生の進路は大学・短大が3割で、専門学校が5割、就職は2割。ほとんどの進学者は推薦入試制度を利用している。校内には、樹齢500年を超える徳川家光が大事にした国宝級の五葉松の貴重な盆栽2鉢がある。

東京で農業を学べる都立高校

▽園芸高校(世田谷区)▽農芸高校(杉並区)▽農産高校(葛飾区)▽瑞穂農芸高校(瑞穂町)▽農業高校(府中市)▽青梅総合高校(青梅市)▽大島高校(大島町)▽三宅高校(三宅村)▽八丈高校(八丈町)。

※都立高校は186校(2017年4月)、私立高校は145校(2016年4月)。

き継げる農業にしていけないと農業は持続しないと思います。これから農業をやりたいと思っている子たちには手厚い保護が必要だし、やりたいと思っていてる子は農業高校にまだまだいいと思います。その子たちが夢を持つて農業という産業の中に入るためのハードルをどんどん下げてほしいと思います。

農業は面白い、農業教育は面白いと声高に言っていきたいと思っています。全国農業高等学校長協会では今年3月、第3次アクションプランを策定し、「グローバル・アグリハイスクール宣言」を出しました。「グローバル」はグローバルとローカルを組み合わせた言葉で、視野は世界的なもの、行動は足元からきちとやっていこうという宣言です。農業高校はこれに沿って動いていきます。それを見守ってほしいし、応援してほしいと思います。農業高校は面白いんだということをいろんなところで言ってくださるとありがたいです。